毎月一回

義太夫雜誌

第二卷
第一號

義太夫雜誌社

《明治廿八年五月十五日發行》

本號の目次

再興條……桃の屋鶴彦
院本の話……菊六子
新聲館を難す……櫨の屋笆人
女義太夫の原始……黒田撫泉
義太夫雑誌の再興を祝す……鶯亭主人
再刊梅花榮……合作
竹曲古物博覽會狂歌合……霞峰作
いと櫻（小説）……順理堂主人
重驗（小説）……合作
又饒舌……竹本綾瀬太夫○花澤小房○……なにがし
竹本小政……作
藝苑噂聞書……京班○小染○源太夫○組太夫○合……みるかは
女義太夫の分拆に就て傳通轉愚に……小
世の藝評家に……樂壽亭主人
くせよせ……花の家鉦月人
句評判一二……峰の家主人
娘淨瑠璃（二代目）短評……露の家尾花人
竹本お傳……赤城妙屋人
故竹本住之助……七文字屋
女淨瑠璃の事……花の家鉦月
雜筆……茂句念
忠臣藏に係る院本……修紫樓
七福人……天

綾瀬と彌生。住之助。プラウド。義太夫會。素行の俠心。播磨と小土佐。ギダ黨の現況。若竹と宮松。賣謠の隨一。小人世界。

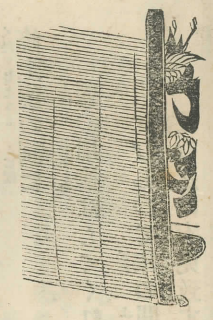
考へもの。ぞゞ一。一目千人。　桃

廣告

義太夫雑誌前卷　掲載要目

○論説　義太夫と國家の關係、義太夫謠曲の壽天○寄書　三味線の權輿、院本の話、耳蘆集拔書、東四と有髪○傳記　近松門左衛門小傳、竹本義太夫の傳、竹田出雲小傳、竹本東玉小傳、西澤一風小傳、竹本小土佐小傳、越路太夫小傳、竹本綾之助小傳、紀海音小傳○古曲　上るり十二段○批評　近松戯文評、海音戯文評、竹本綾之助、竹本小土佐、俳句見立評、團平と慷慨家かり、竹本越子、竹本清玉、竹本小清、豐竹素行、柳と駒辰、豐竹一二三、八重子の評、大隅太夫、竹本小虎、竹本播之助、素巴奴記、七文字屋主人に答ふ○雜錄　綾之助の事、なまりの事、累の事、つねゝ草、前年中の記事、孫福齋の贈書、播磨椽とシエクスピヤ、義太夫に關するイウフボニー、淨瑠璃外題集、豐竹若太夫の事、竹本住之助に就て、京枝の事、椀久の事、巢林翁の逸事、團平師の教訓、東西〳〵の事、天河屋儀兵衛の事、門左衛門に就て、有髪無髪の事、義太夫語昔日譚、ふたくさ、聲曲雜話、馬追船頭お乳の人といふ事、綱太夫の事、樂屋の符諜語、門左衛門の墓に就て○文園　さら御前まつ宵のうらみ、心中江戸三界、あしかりのだん、愉快歌、小説とり扇、源藏の德利、和哥俳句○謾言　天狗の事、與女義太夫書、義太夫節を聽く人に、初對面、義太夫は語るべし義太夫は語らるゝ勿れ其他投票によつて定めし女**義太夫五名家**　則ち名望家、愛嬌家、美音家、巧藝家、美貌家の報告、女義太夫の公平なる**番附**あり、素人連にも岡目八六九評あり○餘興　義太夫に關せゞ情哥、女義太夫名前詠込み情哥、義太夫文句詠込み情哥、物はつくゝ、冠句附一口はなゝ、なぞゝ、文句入

右御用のお方は一部三錢全部二十錢にて差上候也



義太夫雜誌

第二卷
第一號

再興條

義太夫雜誌は何ゞ故に休刊せしや

月に叢雲
晴るゝ時あれは曇る時あり。

義太夫雜誌は何ゞ故に再興せしや

月に叢雲
曇る時あれは晴るゝ時あり。

世の中の事は總てまゝになり難きもの也、そをまゝにせんと欲するものは、欲するものゝ無理なる也、義太夫雜誌生れて此無理を好まず、無理を好まざりしが故に人に愛せらる、其休刊せしも爰に在て存する也、今や運の來りて再び諸君に見ゆるの榮あり、無理を好まざりしが爲と我輩の竊に悅ふ所、諺子曰く〃月に叢雲、花に風〃と、是れ在て花月また爲に興ありとせは、義太夫雜誌は爰よ一の興を負ふて再びせしものとするも誣言にあらざるべし。雙岡に粹なる法師あり兼好と名づく、嘗て義太夫雜誌の此事あるを豫言し、曰く〃花は盛に月の隈なきをのみ珍るものかは〃と、善哉々々喃漢と附會て畢ぬ

院本の話

桃の屋鶴彦

院本は立作者のありて終始一貫せる大筋を定め其段毎に受持の下作者ありて各々意匠を出すものから知らず知らず前後撞着を來す如きこと往々これあり今數多の作本中に於て最も其弊の甚しく且つ世人の耳に熟れたるものを左に掲げん

武田信玄 上杉謙信 本朝廿四孝

二段目の切　上使村上義清が勝頼の首受取らんといふ時信玄の奥方常盤井御前は暫の用捨と猶豫を乞ふ條上使の詞に

暫の用捨はしてくれんと庭に飛びおり垣根の槿引きむしつて床の間の花生へ捻込みコレ此槿のしぼむ迄は宥免致す花がしぼむと夫が寂滅いやと言はさぬ割符の一ト本

其次の條勝頼ぬれ衣に向ていふ

チヽ其恨は尤なれど親の赦さぬ徒なれはどふではかない花の縁もふ槿もしぼむ時分隙入れは恥の恥泣かずとそなたは次へ行きや

四段目の中　謙信諏訪の城に義晴の幼君後室手弱女御前お成の設けをなすといふ條てし元の詞

尋常のお客とは違ふ夫で此間より國々の名物をお求なさるれど今此諏訪の湖に氷が張詰め舟の往來も叶はぬ故何かゞ手づかへ

又その先の文句に

中能見ゆる中庭よりいきせき出る簑作が今は姿も菊作り花恥かしき角額椽先に小腰をかゞめ奥庭の花壇の菊かゞむを伸し延るを縮め枯葉一枚ない樣に殘らす手入仕り漸く唯今相仕思ふ

案ずるに信濃諏訪湖の氷結は長野縣の左の報告を見て

其時期を察すべし、

長野縣諏訪湖は去る七日全面氷結せり今既往三ケ年間の氷結月日を擧れは二十一年は一月十四日二十年は一月七日十九年は一月五日なりき云々

とありて其七日とあるは舊曆十二月六日に當る既往三年の經驗に據れは大凡舊曆十二月初旬より中旬に渉るの候に至り氷面人馬の往來をなすとの事なり依て前の腰元の詞に證すれは十二月の初旬此大賓を迎へたるなるべし然るに今を盛りの菊花壇の御馳走と云も甚だ不似合と思はるゝに花作りの蓑作はいつか衣服を改めて立出て其切十種香の場にて何をかいふ、

誠よけふは霜月二十日我身がはりに相果し勝頼が命日くれ行く月日も一年餘なむ幽靈出離生死頓生ぼだい

斯に於て始て知る其日は霜月廿日なることをされども此年に限りて氷結も常よりは早く菊花壇も遲くまでありしとして見免すべきことの出來得るも特り牽強のきかぬは二段目に出る僞勝頼身代りの時の朝顔なりいかに信州の時候狂ひたれはとて霜月廿日に朝顔の花盛りを見るべくもあらず作者の杜撰唯一笑に附するの外なし近時流行の批評家が小説の破綻を搜し出す如き眼光を以て院本に對しなは此類ひ枚擧に遑あらざるべし。

本篇は明和三年丙戌正月十四日の刊本にして作者は近松半二、竹田因幡、三好松洛、竹田小出、竹本三郎兵衛、竹田平七等なり、

新聲館を難ず

菊六子

過つる頃の事なりき我曲界の老將竹本播磨太夫は大阪に下れり而して其歸るや否白堊青塗の新聲館は忽焉として中古の堺町を裝ひぬ余は之を以て直に播磨が浪花土産とはせざるべし然れども其仕組に於て新聲館は殆

んど大阪の文樂座と異ならざるなり嗚呼淨瑠璃は遂に彼の陋野迂遠なる人形に依籍せざるべからざるか、徒らに今の世を澆季と嘲りて糞尿の如くにいひなし見ぬ昔をのみゆかしと慕ふは人情の常事深く異むよ足らずと雖も此感想の中には幾多禍害の潜伏するものたるを思はざるべからず今や一世を靡かせし洋風の漸々風るにつれて其反動は滔々として起り何事をも復古せしめんとてはては終に理非曲直を別たん遑なきが如き勢をなしぬ這般新聲館の設立も竟に此大勢の渦中にあらざるなきを得んや、

義太夫に人形の併行せしは中古の名殘とのみ思ひしに義太夫節が漸く位置を進めんとする今日に當り新に義太夫社中が議を決して再び此迂濶を演せんとするは實に斯曲の不運と言はざるを得ず義太夫は俗曲なり勉めて平易卑近を要すべしとの見解より出でしかは知らねども俗曲と雖も時勢に應じ世態につれ此品位を進めずんは遂に世に棄らるゝに至らんも知るべからず中古操り人形の東西に旺盛を極めしも時代を夢みて唯々漫然淨瑠璃と人形を併立せしめんとするに至ては識者の與せざるところ昔日羅山が操人形を見て大に其巧妙を唱へ陳平が城圍を解くの奇謀を感せしが如きも思ふに一場の戯にして唯能く使ふといふを賞したる成べし今の人形は恐くは其當時に比し幾層の精巧を高めたるべしと雖も元來木偶なり倩屈にして些の精神なく些の情思なし況や氣韻の如き得て望むべからざるとにして徒に眉を蹙かし口を開くも畢竟兒戯に近く人形師が黑衣暗裝舞臺を横行するに至ては却て曲調を害する甚しく寧ろ拙陋の極といふべし是我私見に非して斯曲を愛する者の屢同情を表せらるゝところなり、

世に歴史ほど貴きはなし然れども歴史に泥んで進歩を思はざる如きは之れ歴史を殺すものたらずんはあらず社中の計議恐くは之に近きことなきや況んや淨瑠璃の

初を考ふるに其作本は物語草紙等より脱体し來りて文章と音調とを尙びしが如し井上播磨椽が淨瑠璃節は平家を和げて謠に似たるものゆへ淨瑠璃に師なし謠を以て師と心得べしと言しは實に斯曲の骨髓を得たりとやいはん然らは中古人形に賴籍して淨瑠璃を語りしは市井の大勢に沒せられし謬とせざるべからず其當時幾多の漢學家俳文家情書家の輩出せしありしと雖も世は概して文想に疎く武士の多くは經典に泥みければ淨瑠璃座の顧客は彼の俳句狂歌を弄し若くは消息文に足れりとせし商工の輩なりしなるべしされば概して卑近なること多衆の耳に入り易く爲に淫猥なる情書の多く行はれて門左出雲等が若心の本來とは相違して文章着想の如何は當時及び後世か文筆家の知見を得たるに過ぎりきされば市井の眼は一に人形に集りて其進退動作を評し合へるは今の所謂新聞物（世話物）が平易を以て流行するの餘り遂に識見ある大家すらも抂げて時世ょ諛ひたる如き形蹟あるを見て知るべきのみ今や時勢一轉教育普く及て四民皆多少の文字あり殊に義太夫の顧客は昔日の如く狹く卑き部分のみに限らずして漸く汎がらんとし縉士者流にも大に尙ばれんとする此機に當り自ら其品位を低なして再び昔日の浮輕なる市井の愛翫に供せし時代を摸倣せんとす之を拙陋ぞ呼ぶも蓋し誣言に非ざるべし、

其以前は漸く措き人形が寛文の頃小平太によりて發育せられしより今に傳て殆んど二百五十年淨瑠璃節を汎く行はれしめし功は沒すべからず雖も若し是無かりせば其位置品格に於て大なる進步をなせしやも知るべからず否少くとも之を低下せしめたるや疑なし實に人形は斯曲の爲に功罪相半すと云べきか現時國五郎か技を見るに素より尋常ならず又其容易き業に非るは我人共ょ之を許せり然れとも其巧其妙を以てするも猶義太夫節が高調融和を害するは覆ふべからざる事なり余之

が例證を擧んも敢て難事にあらずと雖も同好の士既に恐くは首肯せられしなるべし嗚呼かばかり斯曲の本旨に反逆すること明なるも遂に之を廢除し能はざるか今や斷して茶毘一片の烟と葬る可きの時なり若し夫れ院本を演藝するは梨園のあるあり何ぞ必しも窮屈無神なる人形を用ゐんや曲界の老手等以て如何となす、

義太夫本來の主旨前途の運動に關してハ余又聊鄙說の在るあり然れども這は別個の問題に屬し今は唯人形の非を概言せしに過ず他日を待て更に大方の敎を請はんと欲す。

女義太夫の原始

櫨の屋笆人

公開の興行場に出席して婦女の義太夫節を謠ふは何れの頃より始りしやといへるは女義太夫の盛に行はるゝ今日にありて衆庶これを探究しつゝある所なるべし、余未だ幼少なりし維新前後に於て見聞する所に由りては當時義太夫は大に癈れ居たるものにや那の熱闘の地たる淺草奥山兩國廣小路の場所に至りても女義太夫の寄席あるを見ず（或は認め能はざるにや）これに反して女の新内節を語る爲に設けたる寄席は往々これを見しことあり兩國の如きは一のみあらず二三軒を列ねて在りき其他少しく人の麕集する地には必ず在りたるものゝ如く既に下谷山下の如き僅に行人の絶へざる地に於てすらこれを見たることありたり（山下は今の上野公園地山王臺の東麓停車場と割烹店岡村との間西側の地即ち上野山内境界の塀外）これ畢竟當時新内節行はれて義太夫節の行はれざるに據りたるなるべし若し義太夫節にして今日の如く盛に行われたらんには女義太夫の公開興行場も女新内の如く散見すべきならん然るにても江戸の地に於ては當時女義太夫の行はれざりしを知るに足る京坂は然らず疾くも女義太夫の行はれた

りと見へ余が京都に至りし時（明治二年）誓願寺地内に於て公開興行場ありたるを見無心の幼者以爲く恰も江戸に於ける女新内の如きものなりと蓋し江戸に見ずして初めて此地に見たる所以なり、

以上は唯余が記臆力を具へたる時より今日に至るまでの間に見聞記臆せるものを云ふのみ中古の事い得て知るべきにあらざりしが頃日或る書を繙きたるに左の事ありしまゝ茲に掲げて未だ知らざるの人に紹介するとゝなせり、

浄瑠璃を語るは特り男のみにあらず慶長の頃京四條河原に鎌田政清、かうの姫、阿彌陀の腸割なきいふことを語りし女あり文字南無右衛門、左門、よしたかなど其頃世に聞えたる女太夫なりき寛永の末歌舞伎に女を禁ぜらるゝと共に浄瑠璃にもこれを停められたりこれより後此技を以て業とする女は久しく絶えたりしに寛文の頃江戸吉原の遊女にてこれをよくするものありしが職業とせしにはあらずされど享和三年よりまた女義太夫といふもの世に出で來りぬ云云、

以上に依れは中頃禁令のために絶えたるも創始は慶長年間なること確ならん。

義太夫雜誌の再興を祝す

黒田撫泉

皓齒美音鄭衛の曲寔に國を亡ぼすの基なり獨り義太夫節に於ては然らず其字句音調間々淫聲に傾くの嫌なきにあらずと雖ども而も能く忠孝を說き節義を訓ゐ惡を戒しめ善を勸むるの點にいたりては敢て他の俗曲の企て及ぶべきにあらず加之能く俗耳に入り如何なる無識の人といへども傾聽能く事理を解し以て心耳にたのしましむるもの義太夫を措て他にあらざるなり方今義太夫節致たる所に流行し貴賤を問はず貧富を論せず一人として佐和理

の一節位を知らざるものなく又之を口にせざるものなし然れども其之が改良を圖り之を利して以て智識を開發せしむるの機關に至つては頗る遺憾なき能はざりき頃者服部霞峰氏義太夫雜誌を再興し奮つて之が改良に從ひ以て世道人心を益せん事を期し友人を介して予が投稿を求む予や淺學不才敢て其任にあらずと雖も氏が此擧ある實に予の讃賞措ざる所なり依て聊か蕪辭を述べて祝辭に代ふ。

再刊梅花榮

（發行日大繁昌の段）

鷺亭主人

「出にける。昔を忍ぶ武藏野に、妻戀坂と名に高き、義太夫雜誌の本社とて、客は山の手、下町も、うはさ取り〳〵取りに來る、書肆の子僧書留と、郵便屋さへ出つ入りつ、据た機械の車より、眼の廻るほど忙しさに、活字拾ひの子僧まで、目づらを摑むトツパクサ、店の帳場に注文の花主がワヤ〳〵、押し合ひへし合、「コレサ番頭どの今朝から寒いのを堪ねて待て居るのにまだ雜誌を呉れぬか早う見たいと家に待つ人の心も少しは推量したがよいト泣聲出して居催促、さはり文句の繰言もうつて附けなる義太夫好き、此處へも百部此處へも千部、万部刷ても右から左り、餘りに是は賣れ過ぎて、困り果ると思へども、愚痴は言れぬ花主の前、番頭は天窓を掻き〳〵「是は〳〵お馴染のお客樣再刊の廣告もまだ行き渡らぬ先からヤイ〳〵仰しやつて下さるお志有難いとも忝けないともお禮は言葉に盡せませぬ當方も商賣冥利一部呉いと仰せならハイと一部さし上げ度は思へども東もお客なりや西もお客、お客と云ふ字に二つはないア、賣れるでは有るぞへなトこぼしたい程賣れ盛り順番に迫刷する傍から拾部百部と次第を追ふてさし上げ升る少しのうち御辛抱下さりませト右をなだめて左りへも言譯はかり夕まぐれ、此

に、活字拾ひの子僧まで、目づらを撮むトッパクサ、まセト右をなだめて左りへも言譯はかり夕まぐれ、此

方へお呉れ此方へも、暮方までに何十万部、漸くあとを追刷の、出來るが否やサア賣ふ、サア賣てくれ買ふていこト、見る間に集ふ車の數、オットマカセと掛聲高く、數千人の花主連中、次第送りに買ふて行く、賣人の手から錢箱へ、投込む銀貨サラ〳〵〳〵、一番形の弗箱へ、詰め込む紙幣はバサ〳〵〳〵、十露盤球のパチ〳〵と、寄ては返す人の波、並〳〵ならぬ義太夫雜誌の、大當りあろ嬉しけれ。

義太夫雜誌再び發刊の趣承り悅しく

其日の待れければ　花の家

さきへ氣の移りて遠し花の道

義太夫雜誌の再刊を悅びて　竹本浪越太夫

世の中や花にあそへはゝな心

おなじこゝろを　竹澤權左衛門

梅さいて闇にも品の付にけり

おなし心を　かゝゴメな め

雨と見し曇りは晴れて梅に月

はり扇の音たかき今の世の中

狂歌よみもデン〳〵の調子に乗りて

竹曲古物博覧會狂歌合

東西〳〵文臺の床脇より筆不調法なる報條を以て四方のみやびの君達よ聞ねあげまつるは爰も太棹の糸卷側に名の響たる桃の屋うしか立評となりて淨瑠璃の故を温て新らしき考案に意匠をこらし竹曲博覧會の興行を世におほやけに告たりしに三味線のぞう氣求むる好人より兼題の出品先をあらろひておくり三重四五十首獨吟で詠吟し達者もありとかろの出品も十人十種の差

別ありて竹本豐竹の一節ある体あるは見臺の長高き体床本の文字ふとく賑やかなる体はた言の葉の濃やかなる体は斯道ヨ磨た腕の艶かたりにしてお臍でわかす口輕風は人の頷をとく意の滑稽實に面白き体とやいはむ其他とりくに張扇のうち出て數へあげんには尙拾体にもあまるべくやろは審査ずみの陳列品に就て心ゆくまゝ見たまへかしとをこがましくも翠簾内に序の口かたりを述るものは

四代目　繪馬屋額輔

○

兼題出品審査員長　桃の屋鶴彦

陳列品より　賴朝公より拜領の菓子折

出品者　舊仙臺侯

ふたあけて榮は氣をも取かへ子　柳の屋露交

工みのそこをあかす菓子折

彌生　菴

身につもる憂が中にも守とげて　ちらさぬむつの花の菓子折

賜物のことばたくみの菓子折も　けちらされては實も蓋も無

吟風舍弄月

たまはりし其菓子折も喰はせ物　まだたくみさへ青き竹の間

不二の屋

わが君へたまはる菓子の折詰に　いのちの熨斗もそへる千松

鈍々舍太湖

菓子折のあけていはれぬ眞心を　つまんで見する千まつの恩

竹の屋

さわらびの有平糖のこぶしさへ　こくうをつかむ毒の菓子折

弓の屋

ろこふかき工と知て喰ふ菓子の　をり惡しとは開てえいはず

秋の屋

陳列品　金地に一輪朝顔畫讃の扇

出品者　駒澤次郎左衛門

はかなきは照す日影にかざせ共　鈍々舍太湖

よめぬ扇のあさがほのうた

うき秋の身にはきたれど朝顔の　升の屋鶴成

扇のぬしはおもひすてざる

露しぐれふるべに秋の朝かほも　彌生菴

ふたゝびひらくはなの繪扇

わかれてもいつか扇とろの人に　國の屋長丸

おくるなみだのつゆの朝顔

末つひに病目もいえてあふぎ迄　東薫亭鶴舞

めでたくひらくはなの朝顔

見ぬ眼ゑなみだの露をもち扇　竹林舍虎住

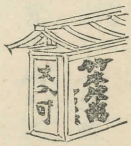
つまがなさけのふでの朝顔

あさがほの花をゑがきし扇さへ　豊の屋鶴年

すへはなみだの種となり鳥

露のいのち長らへてこそ朝顔も　繪馬屋

時にあふぎの幸はありけれ



いと櫻

服霞峰

なんだらう（アノ人は）

二三竿の釣瓶を塀に寄せかけて、長屋全体の共同物と知らしたる井戸端に。

《今日も寒い事子》

と提て來し手桶にトンと音させて下に置き、ろの手は帶の間へ挾みて。

《昨日は何處へ？、一日あはなかッたッケ、子》

聲かけられて米かしぐ手を休め、ふり向さま鼻涎をすゝりて。

《昨日？、昨日は伯母さん處へサ、歸途に柳盛座

へ回ッて來たノ》
《ろりやお樂しみ子、ろして逢ッて來て？》
《ろうサ、ろしてお前のにも》
《そう？、何か言傳がなくッて？》
《なくッてサ》
《嬉しい子、聞かして頂載ナ》
と少しく身を進めて屈む。
《帶のさきが濡れるヨ、お氣をつけな子、ほんとに、そう夢中になッて如何するノ》
《どうでも宜サ、早くお聞かせ》
《何かおでるかい》
《おでるとも》
《何を？》
《金米糖》
《金米糖？》
《ア》
《きッと？》
《きッとサ、雷門の》
《人を、ろんなだから碌な言傳がないのサ》
《なんてよこしたノ》
《いふまい、はじけ豆ぐらいじゃ》
《ろんなら正眞の金米糖を》
《オホ、ろんなに聞たいか子》
《聞たくなくッてサ、後生だから早く》
《マあて丶御らんナ》
云はれて少し首を捻り。
《なんだかわからないが、此間の事でも？》
《此間の事ッて、何か賴まれたノ？》
《ア、ろれじゃないかしら》
《イヽエ、ろんなこッちゃないノ》
《じゃ、なに？》
《アノ、子》

《ア》
《これから子》
《ア》
《あんまり來ちゃいけないッて》
《なぜだろ》
《なぜだか》
《遲れたから、怒ッて居やしないかゑら》
《ろうかも知れない、なんだか怒ッて居るやうだッた》
《ろう？、じやそれに違ひない、有樣は子、此間着物を一枚頼まれて、請合ッたんだけど子、少し都合がゐるいもんだから、ッイ遲れたノ》
と少し鬱憂やうすに、思はずフヽと笑ひ出せば。
《嘘かい？、ほんとに罪だよ》
《だッて此間欺がれた返報サ》
《そりや宜けど子、大事のことまで饒舌たワ、誰にも默ッて居ておくれよ》
折から二重外套を着た二十七八歳の男、鳥打帽子を脱ぎて少し腰を屈め。
《チヨットお尋ね申ます、アノ此邊に花山かほると云ふ、人の家はどこらです》
と問はれて。
《花山？、どこだしら、お商賣でもして居らッしやるンですか》
《イヽエ、淨瑠璃語で》
《じや采女さんといふンでゑやう、ろんなら此處から二ッ目の横町の左側で、門に陶器の表札が出て居ます》
《ろうですか、大きに》
目禮して歸る後姿をながめ。
《好男だ子》
《ア、だが額のハ何？ アノ黑いのハ、痣かしら》

《塵サ、大きなの子、あれで三分ばかり男を下げるよ》

《ほんとサ、しかし何だろアノ人は、情夫じやないか子》

《人の心配までして居るよ、なんたッて宜じやないか》

《だッてサ氣がもめら子》

《なぜ？、情婦の家を尋ねる樣な情夫なら世間は無事サ》

《ほんとだ、あたいも如何かしてるヨ》

《例の事を思つてダロ》

《そうかもしれない、アハ、、、、》

話は少時て、に止みて、おもひくの勤めに忙し。

うらみーなやまのはかけのをををくら
をりくーをくはをりくちりけり

經信

重瞼

順理堂主人

戀は思案の外、いかに分別は仕て見ても、わきへ脇へとろれ易きころ是非もなけれ。われ國元にて親がゝりの折、ふとした事より戀になりしは隣の娘、松とて鬼も可愛がらるゝ年の十八、人目しのびて逢へし罰が乳首に出て、是ではと苦勞はしても、二人なれは文珠の智惠も浮ばず、不孝とは知りながら佛樣をだしに、眞言寺樣の夜談義きゝにと、闇を幸に村を出しは、昨日今日と思へしに早や三年昔し。江戸に着ても知己のなければ、宿屋の内儀に肝煎たのみ、此の店に奉公する身とはなりぬ。

せめては出世して親へれ詫びの種と、忠實に勤めは主人の氣にも入り、定吉〳〵と外のものよりも眼をかけられ、過しれ節句の晩にも、酒事すぎての世間話が我身となり、匿す程の事もなけれは、總てを打明けて

話せしに、お松も呼寄せてその難有き仰せ、二人一所に暮す嬉しさは勵みとなり、産みし子は里に遣りて働けは、いつか番頭の仲間入して、一ッ二ッの取引も出來得る身とはなりにき。

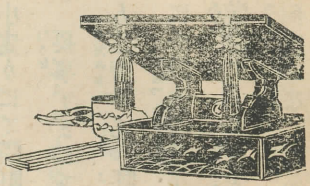
此頃になりての事なり。毎日店先へ酒買に來る廿一二の女ありぬ、江戸の事ひろくは知らねど數あるまじと思ふ美形、仲間の噂には、近き頃、横町へ引越して來し、芳とか云ふ女義太夫とやら、道理こそ花車な風俗と虫の頷首ぬ。今も店へ來りしが相憎く渡すもの、居ぬに取次は、いやな目付にわが手をやんはり握り、小走りにて横町へ駈け込みぬ。

要事すまして風呂上りの氣持よさ、鼻唄で歸る後より定吉さん。呼はれて振かへれは畫のが、寄席もどりにや撥包の樣なもの手にし、お嫌でもあらうがチトお遊びに、と肩先たゝかれて少時ぼんやり、われしらず何處となく從ふて行きぬ。

酒、あがるか注けませう、婆々がお酌も偶には藥、したが此樣なものに見込れて嘸御迷惑、何事も因緣と堪忍して下され、お顔見たさが催促して毎日の酒買、身にも恥づと幾度か我を叱れど堪忍せず、これが通じての今なら神樣も粹、二世目と思ふて定吉さん、萬望たまには遊に來て、土になつても此恩は着ますると、膝に倚れて見上げし顔の美しさ、重瞼のどうも云はれぬ愛嬌、歌麿が圖にも無い形なり。その心配はお互と、お松の事も何時か忘れて手を取れば、嬉しき水を瞼に湛へて莞爾。

枕屏風を蹴仆してナノレとの一聲、扨は謀られしかと、今更梅の在りしを思ひ出し、夜具はね退けて飛起れは、身は帳場格子に倚れての轉寐。ア、夢でありしか七兩二分の德分と瞼をこすれは、子僧げゝんな顔して何か御用？、イヤ後刻に蕎麥おごると腋窩の冷汗のでえぬ。

（これきり）



告條

東西のみなく様ますく御機嫌よく居らせられ珍重至極に奉存候、隨て私共儀當義太夫雜誌と共に暫く田舍へ參り居候爲め、存じの外の御無沙汰いたし候段、千万お詫び申上候、扨今度また〳〵御地へ罷越し、下手ながら二三の新顔も相加へ《怒つちやいけないよ上手でも御客樣へは下手といふのが吾々の道じやないか分らない奴だ》相替らず興行仕候へは、何卒〳〵舊に倍し御ヒイキお引立の程偏に奉願候此元御覽に供するは題も改めて

又饒舌

とし之を勤むるは左の通に候也　頓首百拜

評判人　樂壽亭壽樂・吾嬬家みや子　小春治兵衛　七文字屋微笑

竹本綾瀨太夫

小　年は取ても綾瀨い綾瀨だ　吾　ろうサ男の女に成た例が無い　樂　靜かに〳〵　小　この人の宗玄が日向島を聽ちや外に無い子　樂　日本一といふ評判だ　吾　ろの筈サ土藏の三戸前も腹へ入れたんダもの　七　道理で大きい　小　ハヽよかつタ……がよくあいは此頃の狀態サ　樂　綾之助一件か子あれじや新聞にも酷く打かれた　吾　ろうろ豚尾漢の腸にも劣つてるつて　七　米屋町の通人のたまハくサ「ぼけたとて迷はしやんすな不覽なおまへ人は落目か一大事ッ」　吾　ほんとだ名の爲に惜む。

花澤小房

吾　ウフヽ　小　いやな笑をするヨ女だもんだから　七　若いから無理もないサ　吾　おしやます通り　樂　オイろう噪がないで早く評を　吾　別嬪ですナ頗る　小　顏じやないよ　吾　これはしたり　七　若人では能く語るが惜い事よや聲が子　吾　中言ですがチヨイと……アノ聲は此頃少しつぶしましたか

ら小久しいもんダ併し三味線の高いのが幾分か障るかもしれん樂と云ふて三生をなげちや兎てもアノ人氣が吾と取れんと云ふのですか失敬ナ僕等は三生の居ない方が七べんり便利だと云ふのかアハ、、、。

竹本小政

なにがし

年齡四旬許り容貌態度瀟洒たり聲朗かにして玉の盤上を走るが如く徐々語り行きて毫も澁滯なく輕く体を動かすに連れて樂々と聲の回るは感心なり男よりは女に向きのよき藝風よく云はゞ輕妙ゐるく云はゞ貫目なくして張合なし余り綺麗すぎて勢ひ余情に乏しきは是非もなし夕霧伊左衛門、中將姫雪責、お俊傳兵衛堀川、廿四孝四ツ目、染分手綱子別れ等は何れも其長處とす此丈また欷歔に巧みにして藝の六分は之に力あり本姓は八幡ろの名を政といふ。

東西〳〵此ところ御披露つかまつるは前代未聞義太夫雜誌特得の評判記にて即ち

藝苑噂聞書

と題するもの次號より掲載いたし御覽に入れ候ろの趣向は先づ本社に於て二人の演藝者を撰び之に愛讀者の綿密なる批評を請ひ勝たる方へ本誌一部進上するなり取敢へず今回は左の人を撰びたれば十分おしらべの上くゐしき評判記を御投書くだされたし。

東　源太夫　左　小染
西　組太夫　右　京旺

〆切は來る廿五日にて延引なし總て私が係なれば宛名は私にて文字明瞭にお記しの上御投書願上候也

月　日

七文字屋微笑

女淨瑠璃の分析に就てかすみ

予嘗て「女淨瑠璃の分析」と題し左の一表を試みて是を「やまと新聞」の紙上に掲ぐ。

竹本小清	△五分	○三分	×無
竹本綾之助	△三分	○五分	×二分
竹本小土佐	△四分	○三分	×三分
竹本小政	△四分	○四分	×無
竹本越子	△三分	○三分	×三分
花澤小房	△二分	○二分	×三分
竹本素行	△四分	○三分	×無
竹本小大	△三分	○二分	×無
豐竹清玉	△三分	○三分	×一分
竹本小染	△四分	○三分	×一分
竹本千歳	△四分	○二分	×無本
竹本土佐吉	△四分	○三分	×無
花澤柳	△四分	○二分	×無
竹本三福	△三分	○三分	×一分

（備考）△印は藝　○印は聲　×印は容色

後ち傳通轉愚といへる人「女溜瑠璃の分析の分析」といへるを「繪入日報」に投し左の相違を示す。

竹本小清	△六分	○四分	
竹本綾之助	△三分	○五分	×三分
竹本小土佐	△三分	○三分	×二分
竹本小政	△五分	○五分	
竹本越子	△三分	○三分	×二分
花澤小房	△三分	○二分	×四分
竹本素行	△五分	○三分	
竹本小大	△三分	○二分	
豐竹清玉	△四分	○三分	×二分
竹本小染	△三分	○二分	×一分
竹本千歳	△三分	○二分	

花澤　柳　△四分　○三分
竹本　三福　△三分　○三分　×二分

彼は分析することを知らざる者なり凡て物を分析せんと欲せは必ず其定位を印し而して後に行ふもの彼は徒らに猿智恵を搾つて予を笑はんと欲せし彼自ら胡盧を招きしなり呵々。

見よ綾之助の如き合して十一分となれり其一分何づれより來るか予は十分を定位とし是ゝ因て分析す故に或は無理なるもあるべし予之を知らざるにあらず止を得ざるなり何となれは予は五分を以て定位中の最上とし是に依て階級を與へたれは又藝に於て見るに清玉を四分とす彼の耳なきや之を以て推すべし其容色に至ては各自の眼に由て差を來すもの左れは云はず。

コルトン云へることあり曰く言ふべき言を有たずんは言ふ勿れ薄弱なる議論は却て汝の敵を強むと傳通轉愚少しく省みよ左れと己が隨意と云はゝ論外、

世の藝評家に

小はる

評判といふものは難しいもので中々容易に出來るものでない夫を容易にするは其人が間違である殊に雜誌に載せるのは尙更である後ぐまでも殘るから、云はゝ下手にするも上手にするも其人の勝手ではあれど一方は藝人なり其喉で今日を送つて居るのだ夫も褒めるならは害もないが貶されたら本人の大迷惑ばかりでなく人氣に響て來る、

四角なものでも隅から見ると三角にもなる樣なもので聽樣に因て違ふものだ夫に大阪の風、名古屋の風、土佐の風、東京の風と其耳の好みに因ても違ふ評判のまちくなる原因の一は是である、

だから公平を求むるは少しく無理かも知れぬが已れの意見を人に質して十中の七八まで賛成したら善とし否らざれは其意見を擲て顧みざるのだ未練を起すは不公

平の源だから、

また卑劣な精神を懷てはいけない某評者の様に待遇の冷熱、黄白の多寡によつて筆を左右するなぞは其甚しい例である夫から人身攻撃をして得意然として居るのが有る則ち『別世界』といふ雜誌へ投書して居る黒評誌の記者サろれも其藝人に對しての勢ひろこに至つたのならマダしもだが往々脇へそれるからおかしい今度も其轍で弊社のかすみに酷く叱られた併し病のある犬にや障らぬ方がよいのサかすみもまだ〳〵若い彼な記者に相手になるところを見るとゝガどんな返しがあるか見ものサ、オット人の事じやない己れもウッカリ脇へそれた、

モ一つは褒るのと貶すのとばかりて評者の任が濟むと思ふて居る人がある是は大なる間違で褒貶のうちには指教といふ意味がほしい例へは彼の語りは斯く語りしならは如何何某の形は斯ふなりしと云ふのである、眼尻の上り下り笑凹の有るなし頭の長短は評に必要がない只一藝の外は見るに及ばないのだダカラ眼を盞で聽がよろしい、

これだけが自分の思案である今後の評者は此に意を注で貰ひたい。

くせよせ

樂壽亭主人

なくて七くせと云ふ癖なれは誰にもくせの有るものに相違ない有るとしたらば其くせを見付て直さずもヒイキといふ役目の一つならんと此に癖よせの目出しを置く之が主人のくせなり。

組太夫　もがくは〳〵まるでオデ、コ芝居の役者

山登勢　あでで見臺をこする、

小大　上方で云ふパーが有て動物園の象の加し

熊梅　首を据て躍るところ下手な操り、

越子　左の肩下りは何とかも釣り方、
八重子　見臺をなめ過て腹にかたまる、
鶴玉　淺草門跡前の鰐口の看板、
小虎　首ふり三年柿八年、
小土佐　奥歯にシヤモの堅いのが、
龜千代　池の端の齒醫者の人形、

これを記す側に微笑子ありて曰く小大は大ぞうの弟子なりと爲めにアハヽヽ。

句評判一二

花の家鉏月

身は名古屋なれど東京の義太夫ゝ聞ける然り耳には聽かざるも心に聽ねて居る依て一つ二つの評を試む歌人は居ながら所名を知るとは此事く。

綾之助　うくひすや雪も解ねはならぬ聲
小房　夜ゝ雲につゝんてあける櫻かな
熊梅　どてとなふうめが香あるや朧月
柳　酒くさきあふぎ拾ひぬ夕ざくら
小清　花にあき花に出る月またれけり
照勝　留守とまで思ふざしきや春の雨
小土佐　見るものゝ多き春にもさくら哉
越子　花も巢もなきろらさして雲雀哉
東玉　見るてゝろ花に納める牡丹かな

此ほかはしらねは記さずして千秋樂。

娘淨璃瑠短評

峰の家主人

博文舘の小説雜誌「はつ雁」出て筆かしらに思案外史の作になれる「娘淨瑠璃」あらはる、菊板十四行詰廿八頁の短篇とて左程の時間も要せず讀み終りたれば試に評判いたし候、

在京の學生を一塊物と見なして是を分析すれは小説が

四分に娘淨瑠璃が三分女郎買が二分に勉強が一分より成立り、ろてを看破して小説に娘淨瑠璃をかぶせしは思案外史も中々の抜目なき人に候、

凡て世の注意を呼ばんと思ふ時は又一方ならぬ注意を如ふるもの、殊に戰爭文學大流行の最中へ、久々にて現はれし思案外史なれは、なみ大低の筆にてはあるまじと讀まぬ前は樂みなりしか讀み終りて甚だ失望いたし候、

娘淨瑠璃とありしゆゑ定めし其境涯を面白可笑しく記されしてとならんと思いしに、是では惰生が樂屋這入に一二の符諜を覺にしより思附しとか云ふより外なく別に是といふ表題に對しての味は見へ申さず候、

卷中を分ちて上中下とせられたれは此順に從ふて先づ上より初めん、

△一の十一　扇の手を停めてとあるも客ならは兎に角其宅の内儀とあれは團扇にしてほし、

△三の四　洋燈の傘を外して居るは細かい併し傘は笠とありていかゞ、

△同く七　洋机の足を斷繼めた机とは御念が入し、

△六の九　罪も當るまいは矢張むかしからの罰かよろし、

△十の四　以下の數行は近頃嬉しき文字、

△十三の四　客を送り出す太鼓とは偖も目先の見に ぬ書方なり落語席ならはなれど、

中へ移りて、

△十六の九　先刻樂屋でお鮨をとあれど一度やすけをと云はせ後おすしとしたならば眞に近からん、

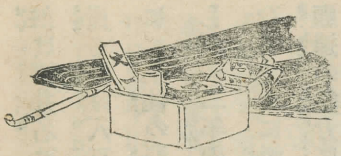
△廿三の五　耳を痛むとて金杉先生を引合に出してあるは耳の痛を喉頭にしてはいかゞ、

△同く十一　吝嗇をせくちいと傍訓して金持をでうまとなきは御存じなき故か、

下へ移りては申分更に無御座候、

藝人の名を呼ぶに身上ならはお師匠さんと呼び同格ならは頭字を呼ぶに此篇には越之助さんとか愛染さんとか呼ぶは眞に遠し、尤も西京地方ならは此呼びあれど其時はさんと言はずはんと呼ぶなり、其外熟字にも六ケ敷文字の處々にあれど是は小生如き無學者の云ふべき筋にあらねは別に何にも申間敷候。

編者曰　本篇は曩に「學の友」誌上に現はれしものなれど本誌に因みあれは此に掲ぐ。



竹本お傳

露の家　尾花

二代目の竹本お傳は府下木挽町の扇屋萬五郎が娘なり（萬五郎は當時船宿を以て業とせり）母は元祖のお傳にて義太夫節の達人なり常に諸侯の愛顧を受けて其名高し二代目も亦身幼より當曲を學び且つ奥を極む加ふるに容色の艶美なるを以て當時の俳優多く是と情を通じ爲めに嬌聲四方に響く初め三代目坂東美津五郎の妻となり後ち別れて五代目瀬川菊之亟に再縁す、其頃にや淺草の某座に於て鏡山を演じ美津五郎が岩藤菊之亟が尾上の役を勤め大入を取りしに或日六ツ目になると見物場より《間男だ擲れ〳〵》と聲をかけしものゝありしかは美津五郎草履を以て實際に打擲せしより事面倒となり且つ大に世に諷はれ遂には繪草紙雜曲の類を作りて出せし程なりしと然るに八丁堀の與力何某のお傳に關係せし實事を訐きて出板せし者の有しより官忌に觸れお傳に關する印行物は總て絶版の運命に及びたり若し夫れ當時お傳の如何に世よ諷はれしやに至りては此お傳に關係せし俳優を顔見世番附に擬し其厚薄によりて等級を定めたる印行物を見ば實に思ひ半に過ぎん是ぞ所謂藝より寧ろ容色を以て世に聞えしものと云つべし文政十一子年二月六日歿す年三十九西本願寺地中に葬る。

故竹本住之助

赤城妙人

姓は櫻井名はナツ明治九年十月府下牛込區上宮比町に産る親は八百屋を渡世とし同人十二歳の時七年の年期にて小住の門に入り藝名を住八とし口語りをなし居りしが一二年の内に藝道頓に上達し時には師の代理を勤むるまでに至りしかは宮松、東橋、小川等の席主と愛顧連の盡力により住之助と改め眞打となりしは僅か四年の後なりしが至る處大入を取ざるはなかりし以て其藝の如何に上達せしかを知るへし翌二十五年の秋師の小住は故ありて睦派を脱し其頃上京の小土佐を初め素行、圓玉、綱巴津、榮糸、清玉、鹿の子等と謀り別に正義の一派を組織して暗に睦派と競爭の傾ありしが暫くにして歸國する者あり睦派へ裏反るものあり終よ小土佐の一座と自分等の二組に止まるに至れり析拐仙臺の松島座より招かれ是非なく同地に一興行を演し後ち一二の他座を回りて十二月の中旬に歸京せしが翌二十七年四月再び地方に出で新潟、山形等に興行し七月頃秋田に移りしが突然肺炎を患ひ遂に養療相叶はず九月の十七日歸らぬ人の内に入れり聞くが如くんは生平品行正しくして藝を磨き且つ友愛の志あつく人を撰はず殊に己が身に比して毎も口語のものを勞はりしと惜哉此人時に年十有九。

女淨瑠璃の事

七文字屋

本篇曩に「やまと新聞」紙上に出せしものなるが櫨の屋氏の文と併せ一讀せは參考の資にもならんかと再び爰に揭ぐ、

此頃は府下の各寄席が競ふて女淨瑠璃を呼び客の耳も好んで是に傾き夫が爲め一雨ごとに看板主の增加し此勢ひにて進めは近き内に口がたり迄が看板を揭げる樣

にもならんが昔しの女淨瑠璃と云へは誠に下位のものにて彼の文祿年中に名ありし六字南無右衛門または左門、吉高の如きも大道講釋に等しく法會祭禮など人の群集する處へ葭簀を張りて往來の人に合力を得しものなりしが是も風俗を害するものと認められ万治の年より女歌舞伎と共に法度になり其後は口にするものもなかりけり寛文年中に江戸新吉原の女郎にて因幡とかいへるもの近江節を語り初め專ら流行せしが寛政度に至りて松平伊豆守か婦人に右て三味線を弄するものは驕奢の沙汰なりとの布令出て又天保度に移りて彼の名高き水野越前守か風俗矯正の布令出しより女淨瑠璃は頓と江戸市中には見る事なかりし此頃の事なり土場淨瑠璃とて采女か原、久保の原、常盤ばし側あゝに小屋を搆へ木戸口には眞打か据りて客を迎へ若し入のなき時は客の中の馴染ある人に頼みて纏頭を貫ひ又おくり迎はし士族の子息株か二本差にて同道し酒席などへ伴はれて酒の相手などせしものありしが此布令に觸れて入牢せしは巴丈、此勝、巴山、此久の四人にて遂に牢死せり噂には當時の女牢名主は花鳥とて以前新吉原の女郎なりしか人殺しの疑にて入牢せし程のものなれば中々大膽なる女にて自分のまゝにならぬ爲め此四人を毒害せしものとも傳へり維新後また少しく驕奢に流れ從て士氣も衰へ次第に歌舞流行の世の中となりしかは山田屋某か大阪へ赴きて其頃評判の女淨瑠璃にて今は小政の三味線彈なる京枝を連れ來り諸處の寄席へ掛合しに土場ものとして取あはず漸く下谷の吹ぬき亭にて興行せしに存外客を引し爲め遂には東京中の寄席を回るとになりたり女淨瑠璃にて肩衣を着けしは東京より此京枝か最初なりしと其後東玉も上京し小傳も上京し遂に今の流行にまで立いたりしか着板を掲ぐるといふ事はなか〳〵六ケ敷ものにて看板上げる前には師匠の許しを受け其々一興行して師匠も許す樣にな

らねば看板主になれぬものなりしに今は不思議の競爭より未だ乳の香の失せぬ小娘まで看板主になるとは女淨瑠璃の末案じられたるものなり。

備考　種彦の用捨箱と云へる書に古鄕飯江戸咄淨瑠璃の起は云々の條「京田舍遠國端島まではやりける程に四條河原にて芝居を立て六字南無右衞門といへる女太夫かたりける時十二段ばかりはばや人の聞ふれて珍らしからざるとて舞にまふ、やしま、高舘、曾我などを彼ふしにかたりけると有るを見て女なる事をしるのみと又沾涼の世事談に「六字南無右衞門と云ふ女太夫四條河原に芝居を立る杉山人の野叟獨語に「其外小普譜の輩は朝夕に唄淨瑠璃琴三味線歌舞伎役者の眞似に日を暮しと又寛文見聞記には「寄場は江戸中に十五軒に數を定め娘淨瑠璃、女髮結地獄の類を禁じとあり其他諸書を飜へせは是等ゑ關する証例少なからざるも今は此に止む。

雜筆

花の家鉏月

三勝半七　茜屋半七は大和五條新町の者にして豆腐屋を業とし三勝は坂地長町四丁目美濃屋平左衞門が女房の妹にておさんと呼ひ三勝は其藝名にて元祿八乙亥十二月七日西成郡難波村の基地にて喉を突て情死したるものにて其豆腐屋の看板及び書置き代官所より撿視の記錄等今尙ほ同地の舊家宗田猪太郎方に保存しありて半七の家屋は同地新町十五番地の岡本きくと云へるが住する家なり同地極樂寺の石碑は寛政三年に建てるもの也尙ほ大坂の舊千日寺の墓地にも俳優の建てし石碑あり江戸の某寺にも寛政八年に俳優岩井半四郎の建てたる者ありと今は如何なりしや知らず又坂地法善寺中に南無阿彌陀佛の名號に梅と桐の紋を彫りたる石碑あり昔より之を三勝半七の墓なりと云へり是等は何れも俳優か淨るり語りの建

たるものなるべし因に本年は二百回忌に當る、

竹田雲出作千本櫻すし屋の段　惟盛の詞に『汝か討てかへりたる首は主馬の小金吾にて内侍が供せし譜代の家來生れて盡せし忠義は薄く死て身替る忠勤厚し』とあるを異き君のみろなはして主馬弱冠の身として内侍公達を伴ひ舊主の行衛を尋ねて憂旅を忍び介抱厚く侍きしは神妙の至なりされは生て盡せし忠義薄しとはすべからず何れも厚しと語るべきをと仰せ言ありしと洩れきゝぬ、

お七の淨るり　お七が父親お七を嫁入らせねはならぬ義理ありてお七に嫁入をすゝめ段々異見を爲る時お七が言……捨て嫁入をするならはいたづら者とも惡性共世に唱はるゝは數ならずいとしいお人が嘸やさぞ聞へぬものじや不義者と恨かけるが私しや悲しいお前の義理が切なくば私しが義理もチットまた思ひやつて下さんせと」是迄がお七が言葉なり「親に恨も男故つまらぬ理屈ぞいじらしき、と地へ下して作者が道理を云ふ也親に恨をいふは吉三ゆゑではあれどお七ゝ理屈は本の理屈でないつまらぬ利屈なり然れど意氣地らしいと評したり實の意氣地と云ふでなし人の道の意氣地を立るならば吉三を思ひ捨て父親の云ふ事を立つるか本の意氣地と云ふものなりと意氣地らしいと作りたりし此處肝要の文なり總て淨瑠璃作者は忠孝を初め勸善懲惡の事をはづさず十分色情は作りて又つまりは其善惡を分別して言ひさとしたり。

忠臣藏に係る院本

茂句念

數多ある戲曲中幾たび聽ても飽かぬ心地せらるゝは假名手本忠臣藏にて不景氣の演劇にも此狂言を出せは大入を占ると昔より傳ふるも實に理なり予由なき業なれ

と今、忠臣藏に關係ある院本記臆のまゝ列ね擧げて世の義太夫嗜好の諸君に紹介せん尙ほ遺漏あれは幸ひに補ひたまへ、（編者曰、忠臣一カハ見たず）

兼好法師物見車
假名手本忠臣藏
忠臣後日噺
難波丸金鷄
忠臣金短冊
太平記忠臣講釋
忠臣二度目清書
忠臣藏後日の建前

この他滑稽物にては

忠臣藏人形廻
山科の後仕舞
長門本忠臣藏
勘平しゝ汁屋

なとあれど何れも一段限りのものなり。

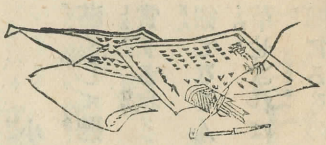
七福人

修紫樓

藏書家　竹本小清
至孝家　竹本綾之助
研究家　竹本小土佐
謙遜家　竹本三福
能書家　花澤小房
慈善家　竹本越子
義俠家　竹本素行

○ほめたからとてわけのあるとけでもない○と云ふて置かぬと悋氣のうば杖てうだいするかもしれぬから底で此次には七惡人といふのを投じ升ろれもお氣にめしたら掲載して下されと目鏡ばしの新參もの申す。

綾瀨と彌生



共に女義太夫の助力に因て起つ其心や憐むべし聞くが如くんは近に文藏も亦この企ありと義太夫社會これより乱れむ。

住之助

不幸短命にして死す然れど今に至て彼の爲に一の追悼會あるを聞かず彼を愛顧せし人今ありやなしや。

プラウド

義太夫雜誌發行以來熱心なる投書家あり仙壽樓主人と す頃日一書を寄せ且つ曰く──漫りに添刪を加ふるなかれ──と我輩公平を以て世に起つもの何を苦て漫りに添刪の勞を取らん左れど其甚だ惡文なるに至ては本誌の許さゞる處なり故に時には己を省よ敢て記す。

義太夫會

初て生る其組織を知らんと欲せば請ふ見よ廣告欄。

素行の俠心

舊某席主あり貧に迫て救を各藝人に求む一日素行の許に行き奉加帳樣のものを示すや素行一々之を讀み且つ曰く播磨さんが壹圓とあれど舊知と云ひ新睦の頭取さんなれは斯樣なことはあるまじ妾の樣なものでさへと云終て貳圓を與へ又顧みざりしと傳ふ信乎。

播磨と小土佐

一日相逢ふ播磨曰く綾瀨さんも綾之助の助力をかる樣になつたから己もお前に賴む樣になるかもしれんと云終て一笑せりと望みらくは是をして識たらしむるなかれ。

ギダ黨の現況

として日本醫事週報は云ふ一時は杏林を吹きなびけむかと疑はれたるギダ風も今は少しくなぎ鹽梅となれり……されど今も尙ほうなりつゝあるは熱心なる頭領達四五輩あるのみ中に就て高輪、南鞘町など先づは此道

の達人とも申すべきかと其人は誰？　兎に角我黨の勇士届せず撓まず請ふまず〳〵つとめ。

若竹と宮松

共に寄席の第一に位するもの而して藝人に對する亦最も親切他に其比を見ずと語る曰く天は助くるものを助く。

賣謠の隨一

婦人矯風雜誌あり府下の密賣謠者を示して九千八百六十名と云ふ而して女義太夫を其一に置く豈嘆ずべきの至りならずや嗚呼。

小人世界

藝として聽く可き者なし云はゝ可愛きとの一点に因て賞する也ろを如何に思ひ誤りてか無暗に出席せしめて銀となさんとす嘆すべきの至りと云ふべし今にして改革せざれは恐らく後世に名人を聽くの期あらざるべし師たるもの少しく慮つて可なり。

てんぐは係

余白のなきため餘興は次號へ讓りましたそこで課題は。

發句　時鳥　（金物の結び）

情歌　ほんにお前は　（冠附）

〆切　五月二十五日延引なし

この外、落語、川柳、三題噺なんでも漢でも義太夫に關係あれば尚更投書次第掲載仕らず〳〵候。

考もの　かなめ

1　チヤン〳〵を片ッ端から　（女義太夫名前二つ）

2　お前さん御運かよいから思ふ事は何でも　（同上一つ）

ぞゝ一

てれん手くだで欺すと知らず

堀川『ろりやきてにません傳兵衛さん』

お言葉無理ではないかいナ　竹本熊梅作

評曰　狐の多い世の中なれは眉毛に唾を……

一目千人

桃　天

鞋千足は覺悟の前で漸くの事に探し出した藝人の宿所イヤ大低の事じやなかつタ、ろんなに骨を折らずとも區役所へ行けばわかる？、やれ〳〵此人は察しのない人ろこを云ふてはみもふたもない、が皆さんの中に、フヽ奴は淺草かと此爲めに戀の下宿屋を知り、この近所まで來たから一寸、なぞと啞をついてお立寄の栞にもならば夫で、よしよし吉原の細見をまねた、ろこで年の見ねぬに氣をもむお方も有ろうが、若しやろれが爲め、切角の戀も消ゆることが有りてはと、これは桃天が粹じや〳〵。

淺草側（一）

猿屋町九番地岡村安吉方田所クス事
竹本山登勢
同濱口リウ事
竹本隅吉
同川村カメヲ事
竹本相蝶
同西山リウ事
豐竹呂玉
同二番地野村道之助方早川正忠事
豐澤一兵
同十一番地田所アサ事
竹本小竹
同十四番地濱口ヨ子事
鶴澤大吉
同フデ事
竹本小米
左衛門町一番地松木庄太郎事
鶴澤三治
同鈴木榮二郎事
鶴澤三市　盲人
同西尾イト方山田重吉事
竹本重路
上平右衛門町四番地森本スヾ事
鶴澤燕勝
下平右衛門町九番地中村傳次郎事
鶴澤清翁
同十八番地藤田カツ方同ソノ事
竹本綾之助
同二十一番地加藤房次郎事
竹本織太夫
同廿六番地大和田傳四郎事
竹本播磨太夫
同十二番地星野喜三郎方中

嶋キク事　竹本土佐吉
同三番地速水重太郎方古川ブン事　鶴澤小六
茅町二十七番地都水新助事　豐竹百太夫
同二丁目二十七番地市川松兵衛方佐藤トモ事　竹本綾藏
同市川松兵衛方ツヤ事　竹本艶子
新森田町四番地端野タミ事　豐竹駒之助
新片町四番地田林菊次郎事　竹本福圓

同二番地大島豐次郎事　竹本縫太夫
同三番地八幡マサ方大竹アサ事　竹本鶴淺
同山口ヨ子事　鶴澤豐子
瓦町十八番地西林常七方佐藤ヤス事　竹本濱吉
福井町一丁目廿五番地伊藤重次郎方同ヌイ事　鶴澤燕離
同十九番地須原善太郎方同トラ事　鶴澤氏榮

新福井町五番地樋口シン事　花澤雛榮
同廣瀬市藏方小泉キク事　鶴澤仲秀
同一番地内山精造方長谷川長次郎事　竹本小長太夫
同四番地佐々木忠次郎方川戸庄右衛門事　鶴澤六鳳
同一番地内山精造方高木松太郎事　豐竹松太郎
同片岡藤七事　竹本組太夫
同木津谷吉兵衛事

竹本小隅太夫
同佐奈幸三郎事　竹本緣太夫
柴田龜吉事　竹本十八太夫
同菅谷小三郎事　豐竹巳之助
同高木惣太郎事　豐澤惣太郎
同豐澤勝次郎事　豐澤松之助
同寺井安四郎事　豐竹柳適太夫
向柳原一丁目十七番地高橋吉次郎方村井德一事　竹本こじめ太夫

同村井爲久事
竹本眞吉太夫
同十四番地市川梅吉事
豊竹岡吉
向柳原一丁目十七番地三輪
義惣方松田エン事
豊竹花睦
同三輪セキ事
豊竹ひつ義
同十九番地日吉明作事
野澤喜三郎
同二丁目三番地千葉タマ事
竹本浪しま
同一番地岩崎源八方岩崎カ
子事
鶴澤清子

猿屋町十七番地牧野民雄方
近藤小サン事
竹本湊子
同九番地岡村安吉方吉川ト
ラ事
竹本東吉
同十七番地和田タナ方同ス
イ事
竹本卷野
新片町二番地宮脇フサ事
竹本小房
旅籠町一丁目五番地星野喜
三郎方白木アイ事
竹本土佐尾
同峰谷釼次郎事
豊澤廣次郎

同二丁目一番地三村房次郎
事
竹本浦瀬太夫
同林源之助方上島與三郎事
豊竹東太夫
瓦町十二番地後藤久五郎事
竹本桂太夫
同二十八番地坂本幸事
竹本梅駒
同西村常七事
竹本相榮太夫
同神原新太郎方山賀壽事
鶴澤友子
須賀町二番地金井キン方小
林コマ事
豊竹和歌竹

同上田久兵衛方同テル事
鶴澤三生
南元町二十番地山本勇造事
鶴澤勇造
同五十一番地田中榮造方同
シゲ事
豊澤圓登

（以下次號）

右之内にて若し番地お名前なぞよ變りましたのがあらばお知らせ下さい左樣すると次號には必ず改めますから葉書でもお口傳ても宜しいのですりかりさいすれば。

わたくし

廣告

花月連

月並集情歌題第三回分　屏風、義理、夢、（市外）
立評　櫨の屋笆人宗匠。粹多樓粹多宗匠。　返呻
花評　自升、除夜亭、情亭、蔦亭、小柯、　（二錢）
六月十日〆切七月十日出版返呻
入花　五句合三仙二ノ四錢　東京市本郷區森川町一番地
余五林マシ　二百六十九號　玉句屆所　菅野

本館ハ清閑なる地を撰定したる三層の構造なれは勉學の好適處なるは勿論空氣の流通四方の眺望に乏しからず且つ室内は清潔に飲食料は衛生を主とし万事丁寧を專らとす特に出京間もなき學生諸君の爲には本館十分保護の任に當るを辭せず而して宿料の廉なるは本館の自負する處なり
室内の粧飾品もお望により貸し上げてよし

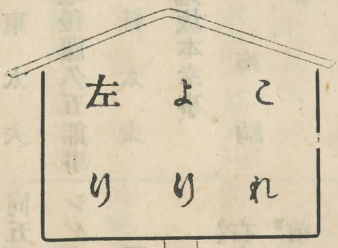
下宿　東京市本郷區妻戀坂なか程　**桃夭館**

株式會社　**東京米穀取引所仲買**

定期米賣買御依頼の節は實直に御取扱可申候間多少に不拘御注文の程奉願上候

本關口信吉

蠣殼町一丁目二番地
電話架設中



世の粹士方へ
御披露の一條

本郷區妻戀町十番地　**義太夫會**

今回義太夫會をるものを設立せり同好の諸君は陸續御入會あらん事を希望す。

義太夫會々則

第一條　本會を義太夫會と稱し義太夫を嗜むものゝ娯樂を以て目的とす

第二條　本會を賛成する者は何人を問はず入會することを得

第三條　本會は倶樂部を設く會員は隨意集會することを得

第四條　本會は當分本郷區妻戀町十番地に倶樂部を置くものとす

第五條　本會ハ毎月發行の義太夫雜誌を無代價にて會員に配付するものとす

第六條　本會は時々演藝會を催すべし

第七條　本會の會員たるものは會費として毎月金拾錢を前納するものとす

但し會員は數月分の會費を一時に前納なすも妨なし

後幕の贈呈　第一回

本會は左の方法にて後幕を贈る

甲の部　投票に因るもの

寄席へ出る藝人なれは男でも女でも看板ぬしでも前語りでも夫れには差別がない只だ投票の得点が一番たんと有れは其人へ贈るのだ投票用紙は義太夫雜誌に付てあるから會員でも會員でなくても夫れに書て送りなさい外の紙に書たのはいけません。

投票〆切は五月二十八日で開票は同三十日

乙の部　抽籤に因るもの

藝人で有ても無くても會員でさいあれは宜しい若し籤が當つても不用の人は其人かヒイキの人へ贈るとも夫れは勝手だ併し會員でも會費を納めぬ人は籤を引く事か出來ない遠方の人は代人を出すか委托書かあれは本會で代籤を引ひてもよろしい。

籤引は五月三十日午後一時より本會でする。

義太夫會　會員姓名報告（其一）

○込合の節は前後御容赦可被下候

所姓名	住所
井筒清太郎君	函館
江原國太郎君	木下衡君
河村かなめ君	名古屋花井鉏月君
富坂きよし君	本郷菅野巴庭堂君
宮田鬼窟君	大坂豐竹呂昇君
吉川雅武君	淺草喜多村祿郎君
飯島彌重郎君	靜岡淺井靜涯君
彌生慶太夫君	本郷牧野自升君
西川都造君	下谷石川久吉君
小川吉子君	日本橋武石八之丞君
木村武唐祐君	神田中浦糸可之助君
浦部不佛鬼君	下谷竹本須美君
島田ゆかりMS君	神田櫛木濱子君
藤田鐵骨君	牛込佐々木素樂君
森澤文朝君	四谷元木松省君
鶴	越中瀧口一抔亭君
	京橋甲田天哲君
	麹町加藤黛山人君
	四谷杉山大作君
	本郷岡田玉子君
	本所淺草平岩嘉吉君
	本郷下谷宮坂きよし君
	淺草牛込河村かなめ君
	本郷下谷江原國太郎君
	深川井筒清太郎君
	下谷
	四谷
	本所
	淺草
	同上
	京橋
	小石川
	金澤
	淺草
	神田

（以下次號）

宿所姓名等御變更の節は迷に御一報願上候也　主幹

定價 ●新小瓶十五錢●小瓶卅五錢●中瓶五十錢●大瓶（特別濃厚製）一圓●地方注文者は郵便小爲替神田郵便局あて取組にて送金の事●郵便切手代用は必ず二割增しの事●運送費は百里以內金十五錢百里以外金二十五錢を添て送金あれ

●着金の即刻送藥す

本劑は全體皮膚を白哲艶美なら膚理を密男女共軟にする峻烈なる特効を有す 故に天質色黑き人は勿論日にやけ黑き人又顏の色青き人顏の色赤き人皮膚毒にて黑き人梅毒にて黑き人おしろいやけにて黑き人あれ性の人へは非常の神効を奏す●且つにきびろばかすあせも腫物の痕なまづたむしわきかはたけひせんただれ等は必ず全治する効を有す殊に本劑を常に使用すれば如何なる炎暑にても決して日にやけることなし

發賣元 東京市外神田五軒町十九番地妻戀坂下 電話三七六 諸賣藥問屋 日新館藥房

わきが根きり藥

本齊萬一無効の時は返金を誓ふ

正價 小瓶金二十錢 中瓶金三十錢 大瓶金五十錢 送料八錢

腋臭必治劑

本劑は學理實驗に徵し今回發明したる前代未發の腋臭根治的の新劑なり、本劑を用ゆれば輕症の腋臭は忽ち速治し經久せる重き慢性病の腋臭をも大瓶一劑にて施せば誓つて根治すること確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる等の患ひ無く生涯再び藥用するを要せず、是れ他にありふれたる賣藥と異なる所の本劑一種特有の神妙なり、乞ふ世の腋臭患者よ速に此の十九世紀改良的の新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絕せよ

東京市神田區五軒町十九番地妻戀坂下 諸賣藥問屋 電話三七六 專賣 日新館藥房

投票用紙

投票者の宿所姓名

被撰者藝名

明治廿八年　月　日

第　回

投票者の心得は裏面ゝ委し

義太夫會の割印なきものは無効

切取る線

切取る線

投票者の心得

○投票用紙には月日。住所。姓名を明記する事
○被撰者の藝名を十分確めて記す事
○今度は第一回なれど此紙は毎も用立つ事
○幾枚まとめて送るも差つかへなき事
○書損じは用だゝぬ事
○かたく封じて「投票在中」と認め送る事
右の條々能く心得て必ず〆切までに送るべし一日にても遅るれは無効になる事

以上

義太夫會

（此回ニ限リ六月五日マデ延ス）